

2013年度

大学院シラバス

国際言語文化研究科



摂南大学大学院

國際言語文化研究科

Graduate School of International Languages and Cultures

國際言語文化專攻

Division of International Languages and Cultures

大学院での学びについて

学長 今井 光規

摂南大学は、「教育の理念」に掲げていますように、人間力、実践力、統合力を兼ね備えた自律的な人材の育成を使命としています。現代社会は、人類の存続をも脅かす多くの問題を抱えています。それらを克服し持続可能な社会を築いていかなければなりません。摂南大学のタグライン“Smart and Human”は、このような課題に対する大学としての取り組みの方向性を示すものです。

本学は、5大学院研究科を設置しています。すなわち、薬学研究科（博士課程1専攻）、工学研究科（博士前期課程3専攻・博士後期課程1専攻）、経営情報学研究科（博士前期・後期課程1専攻）、法学研究科（修士課程1専攻）、国際言語文化研究科（修士課程1専攻）です。

学校教育法（99条1項）において、大学院は「学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度な専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする」と定められています。本学大学院で学ぶ皆さんは、この目的を常に念頭におき、主体的に学修に励むとともに人間的成長を遂げるよう、研鑽に努めてください。

今日わが国は、急速なグローバル化と情報化に加え、世界に例を見ない少子高齢化と人口減少など、大規模な変化に直面しています。このような状況のなかで大学院に学ぶ皆さんには、先人の知恵に学びながらも旧来の考えに囚われることなく、イノベーション創出を目指し、人類の直面する課題の解決に向けて、社会に貢献することが期待されています。

皆さんは、高度な専門知識を修得するとともに、人間として欠かせない高い倫理観と豊かな人間性を備えるよう人格形成に努め、わが国と世界の将来を担う人材として、専門知識と自らの人格を統合する自己陶冶の使命を帯びています。本学教職員は、皆さんの大学院での学びの目的が達成されるよう、あらゆる側面でサポートします。

学術研究は、どの分野にあっても厳しいものです。本学で学ぶ皆さんが、学内だけでなく、地域や世界の人々との多様な研究交流を通して、その険しさと喜びを味わいながら、有意義な大学院生活を送られることをお祈りしています。

国際言語文化研究科の教育目標とカリキュラム編成方針

国際化の潮流はますます加速し、政治・経済・文化・情報など、社会のあらゆる面で国際的な相互依存関係が強まっています。わが国の社会や文化もグローバルな共生の世界を志向する時代に入ってきました。

また一方では、世界各地で戦争や紛争が後を絶たず、さまざまな悲劇を生んでいます。さらに環境問題、経済問題など多くの問題が世界的規模で拡大しています。今やわれわれは、これらの諸問題と否応なく直面せざるを得ない状況となっており、国際社会においてわが国が果たすべき役割はますます高まりつつあります。

国際言語文化研究科においては、このような状況を踏まえ、異文化を深く理解し、国際化がもたらす複雑な諸問題の解決に貢献できるよう、実践的語学力を身につけ、高度な専門知識を習得することを目指しています。具体的には、世界の諸地域や諸言語の中でも、とくにわが国と深い関わりをもつ英米語圏と中国・日本を中心とする東アジア地域に重点を置き、自文化と異文化の双方に精通し、国際的に共有される言語と文化を理解できるインターナショナル・マインドを身に付けた人材、すなわち国際社会を舞台にする分野で、高度な実践的語学力と専門知識を持った職業人として活躍できる人材の養成を目指しています。

教育課程は、「英米言語文化研究領域」と「東アジア言語文化研究領域」の2研究領域、および共通授業科目で構成され、さらに、それぞれの研究領域は、言語文化特論科目群と地域文化特論科目群、総合演習科目群からなっています。また、共通授業科目には、専門外国語能力を涵養する「上級英語」「上級中国語」を含んでいます。

とくに本研究科においては、一つの研究領域における高度な学習と主体的な研究を通して専門性を深めるとともに、他研究科の科目も広く履修することによって、複眼的かつ学際的な視点を養うことを主眼としています。

【履修方法】

学生は、専攻する研究領域の指導教員から、履修および研究についての指導を受けるものとする。

1. 選択した研究領域の「総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（論文指導を含む）」4科目8単位を必修とする。
2. 選択した研究領域の授業科目の中から、当該指導教員が担当する授業科目（特論）を含む6科目12単位以上を選択必修とする。
3. 他の研究領域の選択科目から、2科目4単位以上を選択必修とする。
4. 共通科目の中から、「上級英語Ⅰ・Ⅱ」または「上級中国語Ⅰ・Ⅱ」いずれか2科目2単位を含む4科目6単位以上を選択必修とする。

ただし、①研究科長が認めた場合は、他研究科の授業科目を履修しその修得単位を共通科目の単位数に含めることができる。ただし、最大4単位までとする。

②外国人留学生については、「上級英語Ⅰ・Ⅱ」または「上級中国語Ⅰ・Ⅱ」を「東アジア言語文化特論ⅥA・ⅥB」に読み替えることができる。

授業(指導)計画の記載内容の凡例

授業(指導)計画は、以下の項目に沿って記載しています。

1. 科目名等 全授業(指導)科目名に英文名を併記した。
対象となる年次、開講学期、単位数、担当者の氏名を順に記載した。
2. 授業(指導)概要・目的 授業(指導)全体の概要、各研究科の教育目的に基づいた位置付けを記載した。
3. 到達目標 授業(指導)の目的とする到達目標について、できるだけ具体的に記載した。
4. 授業方法と留意点 授業の進め方や予習・復習の指示、課題やレポートの指示等を記載した。
5. 授業(指導)計画 授業(指導)内容が分かるように、原則として授業(指導)テーマ、内容・方法等を記載した。
6. 評価基準 成績評価の方法について、できるだけ具体的に記載した。
7. 教材等 授業(指導)で使用する教材について記載した。

大学院シラバス 目次

英米言語文化特論ⅠA・ⅠB (応用言語学・語用論)	1
英米言語文化特論ⅡA・ⅡB (応用言語学)	2
英米言語文化特論ⅢA・ⅢB (英語語法・辞書学)	3
英米言語文化特論ⅣA・ⅣB (英語学)	4
英米言語文化特論ⅤA・ⅤB (アメリカ研究)	5
英米言語文化特論ⅥA・ⅥB (英語教育学)	6
英米言語文化特論ⅦA・ⅦB (言語学)	7
英米言語文化特論ⅧA・ⅧB (ヨーロッパ思想)	8
英米地域文化特論ⅠA・ⅠB (ラテンアメリカ文化)	9
英米地域文化特論ⅡA・ⅡB (比較文化)	10
英米地域文化特論ⅢA・ⅢB (南北アメリカ文化)	11
英米地域文化特論ⅣA・ⅣB (多文化社会論)	12, 13
英米言語文化研究総合演習Ⅰ・Ⅱ	14
英米言語文化研究総合演習Ⅲ・Ⅳ	15
東アジア言語文化特論ⅡA・ⅡB (日中比較文学)	16
東アジア言語文化特論ⅢA・ⅢB (比較言語学)	17
東アジア言語文化特論ⅣA・ⅣB (日本文学)	18
東アジア言語文化特論ⅤA・ⅤB (日本語学)	19
東アジア言語文化特論ⅥA・ⅥB (日本語教育)	20
東アジア地域文化特論ⅢA・ⅢB (美術史)	21, 22
東アジア地域文化特論ⅤA・ⅤB (日本地誌)	23, 24
東アジア言語文化研究総合演習Ⅰ・Ⅱ	25
東アジア言語文化研究総合演習Ⅲ・Ⅳ	26
上級英語Ⅰ・Ⅱ	27
上級中国語Ⅰ・Ⅱ	28
国際政治特論Ⅰ・Ⅱ	29, 30
国際経済特論Ⅰ・Ⅱ	31
異文化理解Ⅰ・Ⅱ	32, 33

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論 I A (応用言語学・語用論) Topics in English Language and Cultures IA (Applied Linguistics and Pragmatics)	1	前期	2	ニシカワ マユミ 西川 眞由美
【授業(指導)概要・目的】 この授業では、語用論に関するさまざまな理論を使用し、状況に応じたコミュニケーション(主に言語伝達)を多様な側面から分析し研究する。前半は語用論に関する主な論文を読み進め、理論自体の理解を深める。後半は、具体的な言語使用例を使って、なぜ話し手はその状況でその発話を使うのか?聞き手はどのようにしてその発話を解釈するのか?さらに、その発話によって何が伝えられるのかを考察しながら、効果的なコミュニケーションのあり方を追究する。				
【到達目標】 言語学、特に語用論の基礎となる概念や枠組みを理解すること、英語で言語学の論文を読みこなす力、さらに物事を論理的に思考する力を養うことを目標とする。				
【指導方法と留意点】 授業では、英語と日本語の多くの文献を読むので必ず予習をして授業に臨むこと。				
【授業(指導)計画】 授業は、主に、次の項目に添って行う。(1)語用論とは、(2)さまざまな語用論の理論、(3)発話解釈と認知能力、(4)コミュニケーションにおける労力と効果、(5)発話の含意について、など。				
【評価基準】 出席、予習の度合い、授業への熱意、総合的な理解				
【教材等】 適宜 プリント配布			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論 I B (応用言語学・語用論) Topics in English Language and Cultures IB (Applied Linguistics and Pragmatics)	1	後期	2	ニシカワ マユミ 西川 眞由美
【授業(指導)概要・目的】 この授業では、語用論に関するさまざまな理論を使用し、状況に応じたコミュニケーション(主に言語伝達)を多様な側面から分析し研究する。前期に学んだ語用論に関するさまざまな理論を使って、間接表現、ポライトネス(丁寧表現)、レトリック(比喩表現、皮肉、誇張)、談話標識などがどのように解釈されるのか、またそれらを使ってコミュニケーションを行うことによってどのような効果が得られるのか、を考察する。				
【到達目標】 言語学、特に語用論の基礎となる概念や枠組みを理解すること、英語で言語学の論文を読みこなす力、さらに物事を論理的に思考する力を養うことを目標とする。				
【指導方法と留意点】 授業では、英語と日本語の多くの文献を読むので必ず予習をして授業に臨むこと。				
【授業(指導)計画】 授業は、主に、次の項目に添って行う。(1)間接表現と含意、(2)ポライトネス発話、(3)レトリック表現の解釈と効果、(4)談話標識の意味と機能について、など。				
【評価基準】 出席、予習の度合い、授業への熱意、総合的な理解				
【教材等】 適宜 プリント配布			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論ⅡA (応用言語学) Topics in English Language and Cultures ⅡA (Applied Linguistics)	1	前期	2	シヨン マクガバン Sean McGovern
【授業(指導)概要・目的】 この授業は、実践英語能力の大幅な強化をめざし、言語の意味創出に関する研究を行う。すなわち、言語がコミュニケーション媒介の様々な組み合わせによって意味をつくりだす事実に着目し、その多様性を考察する。それは言語だけに限定されず、画像をも含め、それぞれの機能を駆使して、表現の可能性を広げていく。前半はテキストの基本構造を学び、後半は意味創出の原理を学ぶ。各自の論文課題に応用できる英語力を付けるのに絶好の機会になるだろう。				
【到達目標】 毎週の授業ではコミュニケーションの手段としての様々なジャンルのテキストを取りあげ、分析し、その機能を研究し、各自の英語能力向上に役立てていく。				
【指導方法と留意点】 授業では英語でエッセイを読み、文章を作成していく。クラス討論も英語で全て行う。				
【授業(指導)計画】 様々なジャンルのテキストを考察する。テキストの基本構造の学習。				
【評価基準】 クラスワーク40% レポート30% プレゼンテーション30%				
【教材等】 プリント			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論ⅡB (応用言語学) Topics in English Language and Cultures ⅡB (Applied Linguistics)	1	後期	2	シヨン マクガバン Sean McGovern
【授業(指導)概要・目的】 この授業は、実践英語能力の大幅な強化をめざし、言語の意味創出に関する研究を行う。すなわち、言語がコミュニケーション媒介の様々な組み合わせによって意味をつくりだす事実に着目し、その多様性を考察する。それは言語だけに限定されず、画像をも含め、それぞれの機能を駆使して、表現の可能性を広げていく。前半はテキストの基本構造を学び、後半は意味創出の原理を学ぶ。各自の論文課題に応用できる英語力を付けるのに絶好の機会になるだろう。				
【到達目標】 毎週の授業ではコミュニケーションの手段としての様々なジャンルのテキストを取りあげ、分析し、その機能を研究し、各自の英語能力向上に役立てていく。				
【指導方法と留意点】 授業では英語でエッセイを読み、文章を作成していく。クラス討論も英語で全て行う。				
【授業(指導)計画】 テキスト全体、言語や画像、それぞれの機能を分析し、意味創出の原理を学ぶ。				
【評価基準】 クラスワーク40% レポート30% プレゼンテーション30%				
【教材等】 プリント			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米言語文化特論ⅢA (英語語法・辞書学) Topics in English Language and Cultures ⅢA (Present-day English Usage and Lexicography)		前期	2	スミヨシ マコト 住吉 誠
【授業（指導）概要・目的】 現代英語の変化する姿を、実際のデータにもとづいて調査し、そのような変化がなぜ起きているのかについて考察する。現在の英語の姿をいかに辞書の記述に反映するかなども含めて、なにをどのようにどこまで辞書の記述として掲載するべきかなどについて、辞書学の知見を踏まえながら検討・議論する。				
【到達目標】 実際のデータをもとに、英語の姿をできるだけ忠実に追うこと、そして、それに自分なりの説明をつけられるようにすることを目的とする。				
【指導方法と留意点】 現代英語について記述した文法書や研究書の抜粋を輪読し、そこに書かれてある記述について討論をする。毎回各自が気になった文法事項について例を挙げながら簡単なプレゼンテーションをしてもらう。				
【授業（指導）計画】 Quirk et al. (1985), Huddleston & Pullum (2001) などをはじめとする英語の文法書や、現代英語を扱った研究書からの抜粋を読みながら理解を深め、自分で計画的に用例を収集して、それぞれの文献の記述と比較検討する。学んだことをいかに辞書記述へ反映するかを考えていく。				
【評価基準】 授業への貢献度、レポートなどを総合して判断する。				
【教材等】 授業中に指示する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米言語文化特論ⅢB (英語語法・辞書学) Topics in English Language and Cultures ⅢB (Present-day English Usage and Lexicography)		後期	2	スミヨシ マコト 住吉 誠
【授業（指導）概要・目的】 現代英語の変化する姿を、実際のデータにもとづいて調査し、そのような変化がなぜ起きているのかについて考察する。現在の英語の姿をいかに辞書の記述に反映するかなども含めて、なにをどのようにどこまで辞書の記述として掲載するべきかなどについて、辞書学の知見を踏まえながら検討・議論する。				
【到達目標】 実際のデータをもとに、英語の姿をできるだけ忠実に追うこと、そして、それに自分なりの説明をつけられるようにすることを目的とする。				
【指導方法と留意点】 辞書についての研究書の抜粋を輪読し、そこに書かれてある記述について討論をする。				
【授業（指導）計画】 辞書学の論文の抜粋を読みながら、user-friendly な辞書というのはどうあるべきか、どのような記述をすればいいのかについて考える。実際に自分で集めた用例から導き出される「規則」が、辞書の中ではどのように扱われているか議論しながら学んでいく。				
【評価基準】 授業への貢献度、レポートなどを総合して判断する。				
【教材等】 授業中に指示する。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論ⅣA (英語学) Topics in English Language and Cultures IVA (English Linguistics)	1	前期	2	タナカケンジ 田中 健二
【授業(指導)概要・目的】 日本の英字新聞として <i>The Japan Times</i> を使い、社説に表れる言語表現スタイル・使用語彙傾向を学ぶ。そして大きな事件が起こった場合の一般報道記事と社説にどんな文体の差があるのか、また記事内容が社会に与える影響を考察していく。さらに日本とアメリカのジャーナリズム英語を言語表現スタイルと報道姿勢の点から比較検討するため、 <i>The New York Times</i> の記事も研究の対象とする。				
【到達目標】 日米の英字新聞から情報を素早く、正確に読み取ること。またその報道が読者に与えるジャーナリスティックな影響を推測できるようにする。				
【指導方法と留意点】 任意に選んだ英字新聞記事を読みに留意しながら、正確な読解をおこなえるよう指導する。トピックは政治、経済、軍事、国際関係、スポーツ、美術、文化、など多岐にわたるようにしてゆく。				
【授業(指導)計画】 導入として <i>The Japan Times</i> の記事の全体像を把握する。紙面の構成、各記事の提示の仕方、写真の扱いとキャプションの英語、straight newsとeditorialの文体の違いなどを調査する。その後、タイムリーな記事を対象として、文体、語彙、内容、背景となる知識などを調べ、新聞記事が読者に与える効果と影響などを考察する。できるだけ多読をこなし、帰納的に英字新聞のスタイルを体得する。さらに社説の語彙に特に注意して読みを進める。米国の新聞記事と日本の英字新聞記事の間に報道姿勢の違いはあるのか、あるならばそれはどの点かにも留意する。				
【評価基準】 毎回の授業参加を判断する				
【教材等】 授業中に指示する			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論ⅣB (英語学) Topics in English Language and Cultures IVB (English Linguistics)	1	後期	2	タナカケンジ 田中 健二
【授業(指導)概要・目的】 日本の英字新聞として <i>The Japan Times</i> を使い、社説に表れる言語表現スタイル・使用語彙傾向を学ぶ。そして大きな事件が起こった場合の一般報道記事と社説にどんな文体の差があるのか、また記事内容が社会に与える影響を考察していく。さらに日本とアメリカのジャーナリズム英語を言語表現スタイルと報道姿勢の点から比較検討するため、 <i>The New York Times</i> の記事も研究の対象とする。				
【到達目標】 日米の英字新聞から情報を素早く、正確に読み取ること。またその報道が読者に与えるジャーナリスティックな影響を推測できるようにする。				
【指導方法と留意点】 任意に選んだ英字新聞記事を読みに留意しながら、正確な読解をおこなえるよう指導する。トピックは政治、経済、軍事、国際関係、スポーツ、美術、文化、など多岐にわたるようにしてゆく。				
【授業(指導)計画】 <i>The Japan Times</i> の紙面の構成、各記事の提示の仕方、写真の扱いとキャプションの英語、straight newsとeditorialの文体の違いなどを調査する。その後、タイムリーな記事を対象として、文体、語彙、内容、背景となる知識などを調べ、新聞記事が読者に与える効果と影響などを考察する。できるだけ多読をこなし、帰納的に英字新聞のスタイルを体得する。さらに社説の語彙に特に注意して読みを進める。米国の新聞記事と日本の英字新聞記事の間に報道姿勢の違いはあるのか、あるならばそれはどの点かにも留意する。				
【評価基準】 毎回の授業参加を判断する				
【教材等】 授業中に指示する			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論VA (アメリカ研究) Topics in English Language and Cultures VA (American Studies)	1	前期	2	トリイ ユウスケ 鳥居 祐介
【授業(指導)概要・目的】 アメリカ研究(American Studies)の主要な理論と実践について学ぶ。マルクス主義、精神分析、構造主義、ポスト構造主義など、いわゆるカルチュラル・スタディーズにおいて主要な位置を占めてきた諸理論を学び、それらが実際の研究にどのように生かされているのかを、事例を通じて検証する。事例は20世紀のアメリカ文化史、とりわけ大衆文化(Popular Culture)を対象としたものを中心に選ぶ。				
【到達目標】 英語圏のカルチュラル・スタディーズの問題意識とタームに親しみ、特にアメリカ合衆国の文化についての学術的論考を読解できるようになる。				
【指導方法と留意点】 英語、日本語によるリーディングとディスカッションを中心に進める。受講生にはアメリカ合衆国の文化や歴史に対する強い関心と共に、理論的、抽象的なものを含む多くの文献を精読する意欲が要求される。				
【授業(指導)計画】 受講生の語学力および関心分野に合わせて教科書を選定し、最初の3週間で教科書以外の文献も含めた英語文献・日本語文献からなるリーディング・リストを作成する。以降、受講生はリストに従い、文献を読み進めながらディスカッションを行う。学期末には読了した文献についてのレポートを作成する。				
【評価基準】 ディスカッションへの貢献70% + 学期末レポート30%				
【教材等】 和泉真澄・趙無名編著『アメリカ研究の理論と実践』(2007); John Storey, Cultural Theory and Popular Culture (2012)			【備考】 研究室は7号館3階	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論VB (アメリカ研究) Topics in English Language and Cultures VB (American Studies)	1	後期	2	トリイ ユウスケ 鳥居 祐介
【授業(指導)概要・目的】 前期に引き続き、アメリカ研究(American Studies)の主要な理論と実践について学ぶ。後期は特に研究の実例を中心に読むほか、実例の中で分析対象とされている一次資料の精読も行う。				
【到達目標】 英語圏のカルチュラル・スタディーズの問題意識とタームに親しみ、特にアメリカ合衆国の文化についての学術的論考を読解できるようになる。				
【指導方法と留意点】 英語、日本語によるリーディングとディスカッションを中心に進める。受講生にはアメリカ合衆国の文化や歴史に対する強い関心と共に、理論的、抽象的なものを含む多くの文献を精読する意欲が要求される。				
【授業(指導)計画】 後期開始直後に、前期のリーディング・リストを適宜増補、改定する。以降、受講生はリストに従い、文献を読み進めながらディスカッションを行う。学期末には読了した文献についてのレポートを作成する。				
【評価基準】 ディスカッションへの貢献70% + 学期末レポート30%				
【教材等】 前期に指定の文献に、適宜追加する。			【備考】 研究室は7号館3階	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米言語文化特論VIA (英語教育学) Topics in English Language and Cultures VIA (English Education)	1	前期	2	ヤグチ ミチコ 家口 美智子
【授業(指導)概要・目的】 この講義では、英語教育に関する諸問題を受講者が興味のある分野・テーマに絞って論文を読んでいく。論文を読みながら、全体像の把握に努める。ディスカッションをしながら、問題点の解決策を講ずる。				
【到達目標】 日英両言語で論文が読め、建設的な批判ができるようになることを目標とする。				
【指導方法と留意点】 論文を読んでいく。そのためには相当の研究時間が必要となることに留意しなければならない。				
【授業(指導)計画】 同じテーマの英語の論文を10本、日本語の論文を10本読む。研究者ごとのアプローチの違いを学習する。				
【評価基準】 ディスカッションとレポートを基本に評価する。				
【教材等】 授業中に配布する。			【備考】 学会発表をめざしましょう！	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米言語文化特論VIB (英語教育学) Topics in English Language and Cultures VIB (English Education)	1	後期	2	ヤグチ ミチコ 家口 美智子
【授業(指導)概要・目的】 英米言語文化特論VIA (英語教育) ではテーマを絞ったが、本文化特論VIBでは、広範囲に渡るトピックに関する論文を講読していく。英語教育全般に渡る諸問題にふれる。				
【到達目標】 英語教育全般の概要を知り、アプローチに熟知する。				
【指導方法と留意点】 論文を読んでいく。そのためには相当の研究時間が必要となることに留意しなければならない。				
【授業(指導)計画】 論文を20本読む。ディスカッションを行う。また小論文の執筆を指導する。修士論文執筆への基礎となる。				
【評価基準】 小論文で評価する。				
【教材等】 授業中に配布する。			【備考】 学会発表をめざしましょう！	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論VIIA (言語学) Topics in English Language and Cultures VIIA (Linguistics)	1	前期	2	ゴトウ カズアキ 後藤 一章
【授業(指導)概要・目的】 この講義では、現代英語の語彙や統語にかかわる諸問題を、コーパス言語学の観点から検証する。				
【到達目標】 英語の語彙の用法やパターンなどを、電子コーパスを用いて実証的に研究するための基礎力を養う。				
【指導方法と留意点】 コーパス言語学の入門書や論文を読んでいく。基本的に扱う資料は英文なので、相応の予習・復習が必要となる。				
【授業(指導)計画】 資料の輪読を行い、毎時間、ディスカッションを行う。最終的に全体の内容をレポートにまとめる。				
【評価基準】 授業時のパフォーマンスとレポートを基本に評価する。				
【教材等】 授業中に配布する。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論VII B (言語学) Topics in English Language and Cultures VII B (Linguistics)	1	後期	2	ゴトウ カズアキ 後藤 一章
【授業(指導)概要・目的】 英米言語文化特論VII A で学んだコーパス言語学の理論をベースに、実際に電子コーパスを用いて研究を行う。最終的に、学会発表ができるレベルを目指す。				
【到達目標】 コーパス分析を行うための、コンピュータリテラシを身につける。				
【指導方法と留意点】 PCを使ったコーパスの使用方法を指導する。また統計処理についても指導する。				
【授業(指導)計画】 コーパス分析の様々な手法を学び、それらの手法を用いて実際に各自で研究論文を執筆する。				
【評価基準】 授業時のパフォーマンスとレポートを基本に評価する。				
【教材等】 授業中に配布する。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論ⅦA (ヨーロッパ思想) Topics in English Language and Cultures ⅦA (European Ideas)	1	前期	2	イサキヨシヒコ 石崎 嘉彦
【授業(指導)概要・目的】 ヨーロッパ思想の流れは、大きくは近代と古代のそれぞれが特有の性格を持った二つの思想に区分される。分水嶺とみなされるのは、ガリレオとマキアヴェリである。この講義では、特にそれ以後の近代合理主義の思想、とりわけその自然権論と学問論に焦点を合わせて論じる。それに加えて、近代的な思想とはある意味では大きく異なり、近代合理主義に対してゆがめられた形でその基礎を与えることになった古典的合理主義にも目を向け、ヨーロッパ思想における”Quarrel between the Ancients and the Moderns”の意味を考える。				
【到達目標】 西洋近代において華々しく成功を収めた、近代の科学的思考パラダイムの出現と発展のメカニズムを解説するとともにそれを理解し、同時にその限界を探る。				
【指導方法と留意点】 拙論「倫理学としての政治哲学」に基づいて講義する。				
【授業(指導)計画】 1回目：はじめに 2回目～7回目：「倫理学としての政治哲学」第1部に基づいた講義。 8回目～15回目：「倫理学としての政治哲学」第2部・第3部に基づいた講義。				
【評価基準】 出席とレポートによって判定				
【教材等】 石崎 嘉彦著「倫理学としての政治哲学」(ナカニシヤ出版)			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米言語文化特論ⅦB (ヨーロッパ思想) Topics in English Language and Cultures ⅦB (European Ideas)	1	後期	2	イサキヨシヒコ 石崎 嘉彦
【授業(指導)概要・目的】 ヨーロッパ思想の流れは、大きくは近代と古代のそれぞれが特有の性格を持った二つの思想に区分される。分水嶺とみなされるのは、ガリレオとマキアヴェリである。この講義では、特にそれ以後の近代合理主義の思想、とりわけその自然権論と学問論に焦点を合わせて論じる。それに加えて、近代的な思想とはある意味では大きく異なり、近代合理主義に対してゆがめられた形でその基礎を与えることになった古典的合理主義にも目を向け、ヨーロッパ思想における”Quarrel between the Ancients and the Moderns”の意味を考える。				
【到達目標】 西洋近代において華々しく成功を収めた、近代の科学的な思考のパラダイムの出現と発展のメカニズムを解説するとともにそれを理解し、同時にその限界を探る。				
【指導方法と留意点】 拙論「ポストモダンの人間論」を用いて講義する。				
【授業(指導)計画】 1回目：はじめに 2回目～8回目：教科書第8章に基づく講義。 9回目～15回目：第9章に基づく講義				
【評価基準】 出席とレポートによって判定				
【教材等】 使用するテキストをコピーしたものを配布する			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米地域文化特論 I A (ラテンアメリカ文化) Topics in English Speaking Areas and Cultures IA (Latin-American Culture)	1	前期	2	シノハラアト 篠原 愛人
【授業(指導)概要・目的】 多くの日本人にとってラテンアメリカは遠い存在であろうが、アメリカ合衆国にとってはきわめて近い地域であり、経済的・政治的にも大きな意味を持ってきたし、今なお、また今後も重大な役割を果たすはずである。それにもかかわらず、言語の違いだけでなく、文化の差異も大きいいため、なかなか理解しがたい存在のようである。この授業では、ヨーロッパとアメリカ合衆国・ラテンアメリカの関係がどのように築かれ、互いをどのように理解してきたのかを考察する。				
【到達目標】 16世紀のヨーロッパ人の空間認識の変容についての全般的な理解				
【指導方法と留意点】 関連した論文(英語もしくは日本語)あるいは一次史料(英語訳または和訳。場合によってはスペイン語)を読む。				
【授業(指導)計画】 15, 16世紀にアメリカ大陸に進出したヨーロッパ人は、アメリカの自然、人間、文化などを観察し、記録を残した。特に先住民をキリストに改宗させる使命を負った修道士は、先住民の言語・文化研究に心血を注いだ。修道士が残した記録を読み、双方が相手の文化をどのように理解しようとしたかを考察する。				
【評価基準】 授業への参加度とレポートによる				
【教材等】 必要に応じ、配布する			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米地域文化特論 I B (ラテンアメリカ文化) Topics in English Speaking Areas and Cultures IB (Latin-American Culture)	1	後期	2	シノハラアト 篠原 愛人
【授業(指導)概要・目的】 多くの日本人にとってラテンアメリカは遠い存在であろうが、アメリカ合衆国にとってはきわめて近い地域であり、経済的・政治的にも大きな意味を持ってきたし、今なお、また今後も重大な役割を果たすはずである。それにもかかわらず、言語の違いだけでなく、文化の差異も大きいいため、なかなか理解しがたい存在のようである。この授業ではヨーロッパとアメリカ合衆国・ラテンアメリカの関係がどのように築かれ、互いをどのように理解してきたのかを考察する。				
【到達目標】 16世紀のヨーロッパ人の異文化理解・他者認識の変容についての全般的な理解				
【指導方法と留意点】 時代背景や問題点についての講義を行い、関連した論文(英語もしくは日本語)を読む。				
【授業(指導)計画】 15, 16世紀にアメリカ大陸に進出したヨーロッパ人は、アメリカの自然、人間、文化などを観察し、記録を残した。その当時の、つまりルネサンス期のヨーロッパ社会の異文化理解が、スペインやポルトガルの海外進出、征服の拡大に伴ってどのように変化したかを講義し、当時の文献(和訳されたもの)を通してヨーロッパ人の異文化理解・他者認識のあり方を探る。また、できればその問題を扱った論文を読み、論じる。				
【評価基準】 授業への参加度とレポートによる				
【教材等】 必要に応じて配布する			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米地域文化特論ⅡA (比較文化) Topics in English Language and Cultures ⅡA (Comparative Culture)	1	前期	2	ハヤシダ トシコ 林田 敏子
【授業(指導)概要・目的】 歴史学の視点から西洋世界を中心とするジェンダー問題の諸相に迫る。第一次世界大戦期を生き残った女性たちの多様な経験を追いながら、「戦う男」と「戦わない(戦えない)女」という図式ではとらえきれない戦時のジェンダー問題について考察する。募兵活動をはじめとする戦争プロパガンダに「動員」された女性の姿を分析することで、「犠牲者」「戦いを鼓舞する者」「平和の使者」といったさまざまな女性像について考察する。				
【到達目標】 第一次世界大戦を中心とする西洋近現代史およびジェンダー史の概要をつかみ、論点を理解した上で、図像史料や手稿史料等の読解方法を習得することを目標とする。				
【指導方法と留意点】 一次史料を含む多くの文献をもちいるため、必ず予習をして授業にのぞむこと。				
【授業(指導)計画】 (1) 大戦研究の今、(2) 大戦とジェンダー～「戦う性」と「戦わない性」～、(3) 犠牲者としての女性～ベルギーの悲劇～、(4) 戦いを鼓舞する女～白い羽運動～、(5) 銃後の守りと戦時ヴォランティア				
【評価基準】 授業への取り組み、レポート。				
プリント配布。参考文献については適宜指示する。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米地域文化特論ⅡB (比較文化) Topics in English Language and Cultures ⅡB (Comparative Culture)	1	後期	2	ハヤシダ トシコ 林田 敏子
【授業(指導)概要・目的】 歴史学の視点から西洋世界を中心とするジェンダー問題の諸相に迫る。第一次世界大戦期を生き残った女性たちの多様な経験を追いながら、「戦う男」と「戦わない(戦えない)女」という図式ではとらえきれない戦時のジェンダー問題について考察する。とくに、前線と銃後の境を越えて「戦った」女性たちに焦点をあて、女性部隊が巻き起こした論争やスキャンダルを通して、ジェンダーとミilitarizムの関係について考察する。				
【到達目標】 第一次世界大戦を中心とする西洋近現代史およびジェンダー史の概要をつかみ、論点を理解した上で、図像史料や手稿史料等の読解方法を習得することを目標とする。				
【指導方法と留意点】 一次史料を含む多くの文献をもちいるため、必ず予習をして授業にのぞむこと。				
【授業(指導)計画】 (1) 「男の聖域」への進出～「戦う」女たち～、(2) セルビア軍の女性兵士、(3) ロシアの女性兵士、(4) イギリスの「戦う」女たち～陸海軍女性部隊～、(5) 大戦・ジェンダー・ミilitarizム				
【評価基準】 授業への取り組み、レポート。				
【教材等】 プリント配布。参考文献については適宜指示する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米地域文化特論ⅢA (南北アメリカ文化) Topics in English Speaking Areas and Cultures ⅢA (Hispanic American Culture)	1	前期	2	アントウ テツユキ 安藤 哲行
【授業(指導)概要・目的】 南北アメリカ大陸は越境者たちが創りあげた大陸である。この講義ではまず、アメリカ合衆国をとりあげる。現在、すでに人口の半数がヒスパニックとなっているロサンゼルス为例をとるまでもなく、合衆国では今後いっそう、政治・経済ばかりか文化・社会面においてもヒスパニックの存在は無視できないものとなる。だが、そのヒスパニックは合衆国を、そして故国を、さらには自らのルーツとなる国をどう捉えているのか、それを主に文化・社会面から考察しつつ、合衆国とラテンアメリカの関わりを検討する。				
【到達目標】 現代アメリカ合衆国における、ヒスパニックの現状把握				
【指導方法と留意点】 文献・資料の読解と分析				
【授業(指導)計画】 以下の単元について検討する。①アメリカ合衆国と移民の歴史②メキシコとアメリカの関わり③ヒスパニック(ラティーノ)の起源と現状				
【評価基準】 学期末提出のレポート				
【教材等】 第1回目の授業時に指定、また随時、関連図書を紹介する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米地域文化特論ⅢB (南北アメリカ文化) Topics in English Speaking Areas and Cultures ⅢB (Hispanic American Culture)	1	後期	2	アントウ テツユキ 安藤 哲行
【授業(指導)概要・目的】 南北アメリカ大陸は越境者たちが創りあげた大陸である。この講義では主に、ラテンアメリカの現状を見ていくことになるが、まず、アメリカ合衆国とヒスパニックとの関わりを整理、その後、対象を広げ、アメリカとラテンアメリカの関わりを、そして、現代ラテンアメリカの社会が抱える問題を考える。				
【到達目標】 南北アメリカの全体的な把握				
【指導方法と留意点】 文献・資料の読解と分析				
【授業(指導)計画】 以下の単元について検討する。①ラテンアメリカとアイデンティティ②独裁政治				
【評価基準】 学期末提出のレポート				
【教材等】 第1回目の授業時に指定。また、随時、関連図書を紹介する。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
英米地域文化特論ⅣA (多文化社会論) Topics in English Speaking Areas and Cultures IVA (Multiculturalism)	1	前期	2	ホウジョウ ユカリ 北條 ゆかり
<p>【 授業 (指導) 概要・目的 】</p> <p>民族・人種問題の複合化は不断に進行し、それに由来する問題が世界各地で顕在化している。人びとの現実の生活が多文化併存の傾向を強めている。「多人種・多民族」「複数言語」という条件が社会と向き合うための基本的な「文法」にならざるを得ない現代世界では、「多文化主義」は差異の権利の実現というより、新たな国民統合の形態として迎えられる。多文化主義とはひとつの理念であると同時に歴史的現実であり、問題の解決ではなく、新たな問題の始まりと捉えられる。こうした多文化共存に向けた動きを歴史・現状、理念、政策、運動の4つのレベルで理解し、その変容の意味と問題性を考察する。</p>				
<p>【 到達目標 】</p> <p>基本文献に相当する歴史社会学および政治哲学の理論書を読み、国や地域によって異なる多文化主義の由来、解釈、意義等を理解すると同時に、今後の日本社会についても考察を広げる。</p>				
<p>【 指導方法と留意点 】</p> <p>指示された文献を読みこなし、要旨・核心を押さえ、それをもとに自分の考えを批判的に論述する作業を積み重ねていく。テーマをどこまで深く掘り下げられるかは、学生自身の読書量にかかっている。</p>				
<p>【 授業 (指導) 計画 】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 多文化主義とはなにか 2. その背景としてのグローバリゼーション、及び「内面化された」植民地主義 (EU, US, LA, 日本) 3. 政策としての多文化・多言語主義 (Canada, Australia-US間の比較) 4. 運動としての多文化主義 (多様なマイノリティの文化的多様性と権利擁護) 5. 市民のあり方の新しい方向性 (国民国家はどう変わるか) 				
<p>【 評価基準 】</p> <p>授業にいかに関与しているか、すなわち授業時間外の成果を問い、その反映を授業中の議論とレポートにみる。</p>				
<p>【 教材等 】</p> <p>必要に応じて配布する。授業の進度に応じて各テーマに即した文献を提示する。</p>			<p>【 備考 】</p>	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米地域文化特論IVB (多文化社会論) Topics in English Speaking Areas and Cultures IVB (Multiculturalism)	1	後期	2	ホウジョウユカ 北條 ゆかり
<p>【 授業 (指導) 概要・目的 】</p> <p>前期に引き続き、多文化化する世界各地の社会に着目する。グローバリゼーションの進行とともに拡大する国際労働力移動が生ぜしめている多文化状況に焦点を当て、具体的事例をジェンダーと人権の観点から分析する。</p>				
<p>【 到達目標 】</p> <p>個別・具体的な状況把握をもとにして、国民国家を維持しつつ「超民族国家」による「ネオ・リベラリズムと真の意味で対決しうる新たなインターナショナリズム」(P・ブルデュー)の創出はいかにして可能となるのか、考察する。</p>				
<p>【 指導方法と留意点 】</p> <p>提示された文献を読みこなし、要旨・核心を押さえ、それをもとに自分の考えを既存の通念や学説に対して批判的に論述する作業を積み重ねていく。テーマをどこまで深く掘り下げられるかは、学生自身の読書量にかかっている。</p>				
<p>【 授業 (指導) 計画 】</p> <p>日本社会の多文化化を取り上げる。はじめに、その背景にある現代日本が抱える課題を、少子化、高齢化、労働問題、格差問題などの側面から掘り起こし検討する。つぎに、外国人労働力の重要性と受け入れをめぐる賛否両論の論点を検証し、実際に多文化化が進行しつつある学校教育の場での問題の所在を明らかにしてゆく。</p>				
<p>【 評価基準 】</p> <p>授業にいかに取り組んでいるか、すなわち授業時間外の成果を問い、その反映を授業中の議論とレポートにみる。</p>				
<p>【 教 材 等 】</p> <p>必要に応じて配布する。授業の進度に応じて各テーマに即した文献を提示する。</p>			<p>【 備考 】</p>	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米言語文化研究総合演習 I Seminar on English Language and Cultures I	1	前期	2	下欄参照
【授業（指導）概要・目的】 総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。特に、演習 I は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、各指導研究者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大事である。今学期はそのための入門指導を精密に実施し、今後の研究の指針を構築する。				
【到達目標】 各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下理論的かつ実践的な基礎知識を養う。				
【指導方法と留意点】 各研究者の指示に従う。				
【授業（指導）計画】 各自の研究テーマに則して、最先端の基礎知識を理論的かつ実践的にとり組めるよう、効率よく研究できる最適な方法を通して指導するが、各分野の授業計画については各指導研究者が行う。				
【評価基準】 各指導研究者の指示に従う。				
【教材等】 各研究指導者の指示に従う。			【指導担当者】 安藤 哲行、石崎 嘉彦、篠原 愛人、北條 ゆかり、家口 美智子、Sean McGovern、住吉 誠、西川 眞由美	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米言語文化研究総合演習 II Seminar on English Language and Cultures II	1	後期	2	下欄参照
【授業（指導）概要・目的】 総合演習 II は総合演習 I の基礎の上に、さらにディスカッション・文献研究等を通して各自の研究テーマを深め、応用する能力を養う。				
【到達目標】 各研究テーマの理解とその知識を応用する能力を学ぶ。				
【指導方法と留意点】 各指導研究者の指示に従う。				
【授業（指導）計画】 各指導研究者の下、理論的かつ実践的な応用力を身につける最適な方法を基に指導計画を設定するが、各分野の授業計画については各指導研究者が行う。				
【評価基準】 各指導研究者の指示に従う。				
【教材等】 各指導研究者に指示に従う。			【指導担当者】 安藤 哲行、石崎 嘉彦、篠原 愛人、北條 ゆかり、家口 美智子、Sean McGovern、住吉 誠、西川 眞由美	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米言語文化研究総合演習Ⅲ Seminar on English Language and Cultures Ⅲ	2	前期	2	下欄参照
【授業（指導）概要・目的】 総合演習Ⅰ、Ⅱの内容をさらに精密に研究し、指導研究者の指導に基づいて、修士論文作成の準備に取り組む。				
【到達目標】 各自の研究テーマについて、修士論文に向けて明確な方向性をもつ。				
【指導方法と留意点】 各指導研究者の指示に従う。				
【授業（指導）計画】 各指導研究者の指導の下、各自の研究テーマを修士論文の作成に向け効果的な指導をする。				
【評価基準】 各指導研究者の指示に従う。				
【教材等】 各指導研究者の指示に従う。			【指導担当者】 安藤 哲行、石崎 嘉彦、篠原 愛人、北條 ゆかり、家口 美智子、Sean McGovern、住吉 誠、西川 眞由美	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
英米言語文化研究総合演習Ⅳ Seminar on English Language and Cultures Ⅳ	2	後期	2	下欄参照
【授業（指導）概要・目的】 各指導研究者の下、基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。				
【到達目標】 修士論文の完成。				
【指導方法と留意点】 各指導研究者の指示に従う。				
【授業（指導）計画】 修士論文が完成できるよう、論文の中間発表、完成原稿の校正等、指導研究者との綿密な検討可能な計画を設定する。				
【評価基準】 各指導研究者の指示に従う。				
【教材等】 各指導研究者の指示に従う。			【指導担当者】 安藤 哲行、石崎 嘉彦、篠原 愛人、北條 ゆかり、家口 美智子、Sean McGovern、住吉 誠、西川 眞由美	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
東アジア言語文化特論ⅡA (日中比較文学) Topics in East Asian Languages and Cultures ⅡA (Japan China Comparative Literature)	1	前期	2	セトヒロシ 瀬戸 宏
【授業(指導)概要・目的】 中国と日本の近代文学を比較研究する。比較の対象は近現代文学の成立期、発展期、第二次世界大戦後の前衛芸術などさまざまである。この講義では、日本と中国の各時期の特徴的な傾向を比較し、その共通点と相違点を探る。				
【到達目標】 日・中文学の共通点と相違点が理解できる。				
【指導方法と留意点】 大学院の授業であるから、予習を必ずしてくること。				
【授業(指導)計画】 授業概要・目的の内容とあう論文を選び、講読していく。その過程で、ビデオなど視聴覚資料も鑑賞する。				
【評価基準】 出席状況およびレポート				
【教材等】 瀬戸宏『中国演劇の二十世紀』(東方書店)およびプリント			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
東アジア言語文化特論ⅡB (日中比較文学) Topics in East Asian Languages and Cultures ⅡB (Japan China Comparative Literature)	1	後期	2	セトヒロシ 瀬戸 宏
【授業(指導)概要・目的】 東アジア言語文化特論ⅡA(前期)の授業内容を発展させ、引き続き日中比較文学について考えていく。				
【到達目標】 日中比較文学の共通点と相違点が理解できる。				
【指導方法と留意点】 大学院の授業であるから、予習を必ずしてくること。				
【授業(指導)計画】 授業概要・目的の内容とあう論文を選び、講読していく。その過程で、ビデオなど視聴覚資料も鑑賞する。				
【評価基準】 出席状況およびレポート				
【教材等】 瀬戸宏『中国演劇の二十世紀』(東方書店)およびプリント			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化特論ⅢA (比較言語学) Topics in East Asian Languages and Cultures ⅢA (Comparative Linguistics)	1	前期	2	ヤマグチ マサオ 山口 真佐夫
【授業(指導)概要・目的】 東アジアの南側位置する東南アジアの島嶼部には、オーストロネシア語族、西部マライポリネシア語派に属する言語が分布している。この授業では先ず、比較言語学の研究方法を紹介する。そして、19世紀のフンボルトに始まるオーストロネシア語族の研究史を概観し、比較言語学上どのような系統関係を持っているかを説明する。				
【到達目標】 言語学の一分野である比較言語学に関する基本的知識の習得。				
【指導方法と留意点】 授業中に受講者の意見を求めるので、意欲的に発言してもらいたい。				
【授業(指導)計画】 先ず、比較言語学の歴史、発展を概観する。その後、オーストロネシア語族・西部マライポリネシア語派に属する言語について、比較言語学に基づいて説明する。				
【評価基準】 授業中の発言および発表。				
【教材等】 プリントを用意する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化特論ⅢB (比較言語学) Topics in East Asian Languages and Cultures ⅢB (Comparative Linguistics)	1	後期	2	ヤマグチ マサオ 山口 真佐夫
【授業(指導)概要・目的】 オーストロネシア語族、西部マライポリネシア語派の言語の実例を紹介しながら、西部マライポリネシア語派の比較言語学に研究方法を紹介する。また、これまでに日本語との系統関係が考えられてきた、オーストロネシア語族、アルタイ諸語等についても考察する。				
【到達目標】 比較言語学の基本的な作業である音韻比較、比較形態論の習得。				
【指導方法と留意点】 授業中に受講者の意見を求めるので、意欲的に発言してもらいたい。				
【授業(指導)計画】 オーストロネシア語族・西部マライポリネシア語派に属する言語について、実際に音韻、形態法の比較を行い、比較言語学の研究方法の理解を深める。また、言語系統論に対する知識も習得する。				
【評価基準】 授業中の発言および発表。				
【教材等】 プリントを用意する。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
東アジア言語文化特論ⅣA (日本文学) Topics in East Asian Languages and Cultures IVA (Japanese Literature)	1	前期	2	オカワトヨオ 小川 豊生
【授業(指導)概要・目的】 日本の言語文化をかたちづくる本質的特性を把握するうえで、文学領域に対する理解は不可欠であるといつてよい。日本における伝統的なものの形成について典型的な文学作品の読解を通じて認識を深め、その認識を自ら論理化・言語化する力を養成することが、この講義の目的である。日本の文学作品が中心となるが、東アジアの作品も視野に入れつつ、比較文化的な視点からすすめていきたい。				
【到達目標】 日本の文学伝統の総合的把握と個別作品に対する読解力の養成。				
【指導方法と留意点】 取り上げる作品については、受講生の関心に即して設定する。				
【授業(指導)計画】 1 対象とするテキストの設定 2 作品の全体像の把握(古典作品の場合は現代語訳・入門書等を参照する) 3 読解の対象とする箇所を絞りこみ 4 作品研究に有益な文献・論文の収集と読み込み 5 受講者独自のテーマの発見と設定 6 独自テーマにもとづくレポートの作成				
【評価基準】 受講状況およびレポートによる評価。				
【教材等】 授業時に指示する。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
東アジア言語文化特論ⅣB (日本文学) Topics in East Asian Languages and Cultures IVB (Japanese Literature)	1	後期	2	オカワトヨオ 小川 豊生
【授業(指導)概要・目的】 日本の言語文化をかたちづくる本質的特性を把握するうえで、文学、なかんづく古代・中世文学を通じて培われた詩的感性、表現技術、思想内容等に対する理解は不可欠であるといつてよい。神話・物語文学・和歌文学・説話文学といった諸ジャンルを機軸に、かつ美術・宗教・芸能をも視野に入れた領域横断的な考察をめざしつつ、日本の古代・中世における文化伝統の固有性への認識を深め、普遍への可能性をあわせて考究する。				
【到達目標】 具体的な作品の読解にもとづく文学伝統の把握、および独自のテーマによる論理的展開力の養成。				
【指導方法と留意点】 まず、古代・中世という時代の文学状況をトータルに把握する。そのうえで受講者の関心に即して具体的な作品を選定し、さらに細分の読解を試み、先端的な研究状況を視野に入れつつ、独自のテーマを発見することをめざしたい。				
【授業(指導)計画】 1 対象とするテキストの設定 2 作品の全体像の把握(古典作品の場合は現代語訳・入門書等を参照する) 3 読解の対象とする箇所を絞りこみ 4 作品研究に有益な文献・論文の収集と読み込み 5 受講者独自のテーマの発見と設定 6 独自テーマにもとづくレポートの作成				
【評価基準】 受講状況およびレポートによる評価。				
【教材等】 授業時に指示する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化特論VA (日本語学) Topics in East Asian Languages and Cultures VA (Japanese Linguistics)	1	前期	2	ハシモト マサシ 橋本 正俊
【授業(指導)概要・目的】 日本語をめぐる諸問題を取り上げて論じる。 日本語の文字資料を取り上げて、その表現・文体について論じる。また、研究文献も取り上げて、日本語研究の問題点について考察する。				
【到達目標】 日本語について、深い知識と、分析する力を養う。				
【指導方法と留意点】 資料及び文献を講読し、論じる。そこから諸問題を取り上げて、意見交換をする。				
【授業(指導)計画】 ・資料の紹介と講読 ・研究文献の紹介と講読 ・上記についての意見交換 これらを繰り返す。				
【評価基準】 受講状況およびレポート等により総合的に評価する。				
【教材等】 授業時に指示する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化特論VB (日本語学) Topics in East Asian Languages and Cultures VB (Japanese Linguistics)	1	後期	2	ハシモト マサシ 橋本 正俊
【授業(指導)概要・目的】 日本語をめぐる諸問題を取り上げて論じる。 日本語の文字資料を取り上げて、その表現・文体について論じる。また、研究文献も取り上げて、日本語研究の問題点について考察する。				
【到達目標】 日本語について、深い知識と、分析する力を養う。				
【指導方法と留意点】 資料及び文献を講読し、論じる。そこから諸問題を取り上げて、意見交換をする。				
【授業(指導)計画】 ・資料の紹介と講読 ・研究文献の紹介と講読 ・上記についての意見交換 これらを繰り返す。				
【評価基準】 受講状況およびレポート等により総合的に評価する。				
【教材等】 授業時に指示する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化特論VIA (日本語教育) Topics in East Asian Languages and Cultures VIA (Japanese Language Teaching)	1	前期	2	かどわき かおる 門脇 薫
【授業(指導)概要・目的】 第2言語としての日本語の習得研究の観点から、日本語教育に関わる種々の問題を見ていく。具体的には、第2言語習得(Second Language Acquisition: SLA)の理論、外国人学習者の日本語の習得過程、日本語の習得研究、第2言語習得研究と日本語指導等について取り上げる。				
【到達目標】 言語習得及び語学教育に関する知識を得、日本語及び資料を分析する力を養う。				
【指導方法と留意点】 文献及び資料を講読し、諸問題について討論する。また各自の課題発表について意見交換を行う。				
【授業(指導)計画】 文献及び資料の講読・討論・課題に関する調査分析及び発表				
【評価基準】 授業における討論・発表・レポート等により総合的に評価する。				
【教材等】 授業時に指示する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化特論VIB (日本語教育) Topics in East Asian Languages and Cultures VIB (Japanese Language Teaching)	1	後期	2	かどわき かおる 門脇 薫
【授業(指導)概要・目的】 第2言語としての日本語の習得研究の観点から、日本語教育に関わる種々の問題を見ていく。具体的には、第2言語習得(Second Language Acquisition: SLA)の理論、外国人学習者の日本語の習得過程、日本語の習得研究、第2言語習得研究と日本語指導等について取り上げる。				
【到達目標】 言語習得及び語学教育に関する知識を得、日本語及び資料を分析する力を養う。				
【指導方法と留意点】 文献及び資料を講読し、諸問題について討論する。また各自の課題発表について意見交換を行う。				
【授業(指導)計画】 文献及び資料の講読・討論・課題に関する調査分析及び発表				
【評価基準】 授業における討論・発表・レポート等により総合的に評価する。				
【教材等】 授業時に指示する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア地域文化特論ⅢA (美術史) Topics in East Asian Areas and CulturesⅢA (History of Fine Arts)	1	前期	2	岩間 香
【 授業 (指導) 概要・目的 】 この講義では奈良時代から江戸時代にいたるまでの、日本の代表的な美術作品を取り上げ、どのような社会状況のもとに生み出されたのか、何に用いられたのか、主題はなにか、技法の特徴などについて解説する。また授業期間中に適宜、寺院、神社、美術館を実地見学し、美術作品や作品の生まれた空間を体感する。美術を通じて、日本人の考え方や感性に対する理解を深めるのが目的である。				
【 到達目標 】 日本の美術に関する知識を会得し、日本人の感性に対する理解を深める。				
【 指導方法と留意点 】 講義、スライドによる美術資料の鑑賞、美術館や寺院などに実地見学				
【 授業 (指導) 計画 】 古代の美術－鑑賞と解説 中世の美術－鑑賞と解説 近世の美術－鑑賞と解説 レポートの作成				
【 評価基準 】 受講態度とレポート				
【 教 材 等 】 授業中にプリントを配布する			【 備考 】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア地域文化特論ⅢB (美術史) Topics in East Asian Areas and CulturesⅢB (History of Fine Arts)	1	後期	2	岩間 香
【 授業 (指導) 概要・目的 】 この講義では江戸時代に花開いた庶民の芸術である浮世絵を学ぶ。作品を鑑賞し、その歴史的背景、技法、絵師の個性などについて勉強する。浮世絵は日本を代表する芸術であり、19世紀の西洋絵画にも強い影響を与えた。日本の絵師の表現と、西洋の画家の表現は何が違うのかを知る。授業期間中に美術館を見学し、本物の浮世絵の微妙な美しさを体感する。				
【 到達目標 】 日本の美術に関する知識を会得し、日本人の感性に対する理解を深める。				
【 指導方法と留意点 】 講義、スライドによる美術資料の鑑賞、美術館への実地見学				
【 授業 (指導) 計画 】 浮世絵の歴史と絵師について 芝居絵、美人絵、名所絵 浮世絵に見る西洋絵画の影響 浮世絵が与えた西洋絵画への影響 レポートの作成				
【 評価基準 】 受講態度とレポート				
【 教 材 等 】 授業中にプリントを配布する			【 備考 】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア地域文化特論ⅤA（日本地誌） Topics in East Asian Areas and Cultures ⅤA (Japanese Regional Geography)	1	前期	2	ハラヒデサダ 原 秀禎
<p>【授業（指導）概要・目的】 この講義では、東アジア地域の中から日本を取り上げ、日本における「古墳文化」と「古代の開発」について検討を加える。前期では、日本全国に分布する古墳の立地形態を明らかにし、各地域における古墳文化の成立過程、農業開発との関連性、大和政権の影響など、古墳文化の特色を様々な観点から解明する。さらに、各分野における研究の現状や問題点の整理、今後の研究課題など古墳文化の全容を究明していく。特に、「古墳の立地」については、地形分類からどのような分析が可能か、具体的事例を踏まえながら、立地特性を明らかにしたい。</p>				
<p>【到達目標】 日本における古墳文化の全容を理解するとともに、古墳立地研究の課題と問題点、立地研究の方法論を身につける。</p>				
<p>【指導方法と留意点】 講義を中心とする。研究の問題点や課題については、議論を交えて理解を深めたい。また、古墳に関する一つのテーマを設定し、文献研究を行った後、レポートを作成してもらおう。</p>				
<p>【授業（指導）計画】 以下のような順序で、古墳の立地と古墳文化全般について、その問題点と課題を解明したい。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①古墳立地研究の視点 ②古墳の立地環境と地形 ③山地と古墳立地 ④丘陵と古墳立地Ⅰ ⑤丘陵と古墳立地Ⅱ ⑥河岸段丘と古墳立地Ⅰ ⑦河岸段丘と古墳立地Ⅱ ⑧海岸段丘と古墳立地Ⅰ ⑨扇状地と古墳立地 ⑩自然堤防と古墳立地Ⅰ ⑪自然堤防と古墳立地Ⅱ ⑫三角州と古墳立地 ⑬古墳立地の類型化 ⑭日本における古墳立地の特性 ⑮まとめとレポートの説明 				
<p>【評価基準】 レポート内容と講義への取り組み姿勢によって総合的に評価する。</p>				
<p>【教材等】 適宜、講義中に配布する。</p>			<p>【備考】</p>	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア地域文化特論VB（日本地誌） Topics in East Asian Areas and Cultures VB (Japanese Regional Geography)	1	後期	2	ハラヒテサダ 原 秀禎
【授業（指導）概要・目的】 後期は、日本における古代の開発をテーマに、古代の大運河「古市大溝（大阪府羽曳野市所在）」を取り上げる。現在も論点となっている開削年代と開削目的について詳細に検討する。さらに、『日本書紀』に記された「感玖の大溝」との関連性についても、研究史を踏まえながら問題点を整理し、諸説の論点を明らかにしたい。また、方法論としての、地形分類、花粉分析、小字名の検討法、農業水利の復原法などについても紹介する。				
【到達目標】 日本における古代の開発について、「古市大溝の開削と渡来人」をテーマに、それらの研究史、方法論を身につける。				
【指導方法と留意点】 講義を中心とする。研究の問題点や課題については、議論を交えて理解を深めたい。また、古代の開発に関する一つのテーマを設定し、文献研究を行った後、レポートを作成してもらう。				
【授業（指導）計画】 古代の開発史上特筆すべき、「古市大溝」に焦点を絞って、その問題点と課題を究明する。 ①「古市大溝」とは何か ②～③「古市大溝」研究史 ④「感玖の大溝」に関する研究 ⑤「古市大溝」舟運説 ⑥「古市大溝」灌漑説 ⑦「古市大溝」5世紀説 ⑧「古市大溝」7世紀説 ⑨「古市大溝」6世紀中葉説 ⑩～⑭問題点の整理と論点 ⑮まとめとレポートの説明				
【評価基準】 レポート内容と講義への取り組み姿勢によって総合的に評価する。				
【教材等】 適宜、講義中に配布する。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化研究総合演習Ⅰ Seminar on East Asian Languages and Cultures Ⅰ	1	前期	2	下欄参照
【授業（指導）概要・目的】 入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得する。				
【到達目標】 修士論文作成のための下準備。				
【指導方法と留意点】 各指導教員の指示に従う。				
【授業（指導）計画】 各指導教員の指示に従う。				
【評価基準】 各指導教員の指示に従う。				
【教材等】 各指導教員の指示による。			【指導担当者】 岩間 香、小川 豊生、瀬戸 宏、 山口 真佐夫、門脇 薫	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化研究総合演習Ⅱ Seminar on East Asian Languages and Cultures Ⅱ	1	後期	2	下欄参照
【授業（指導）概要・目的】 総合演習Ⅰをうけて、各自が設定した課題についての調査・研究を継続し、討論・発表等を通じて、より次元の高い研究技法の習得と研究能力の向上に努める。				
【到達目標】 修士論文作成のための下準備。				
【指導方法と留意点】 各指導教員の指示に従う。				
【授業（指導）計画】 各指導教員の指示に従う。				
【評価基準】 各指導教員の指示に従う。				
【教材等】 各指導教員の指示による。			【指導担当者】 岩間 香、小川 豊生、瀬戸 宏、 山口 真佐夫、門脇 薫	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化研究総合演習Ⅲ Seminar on East Asian Languages and Cultures Ⅲ	2	前期	2	下欄参照
【授業（指導）概要・目的】 総合演習Ⅰ・Ⅱをうけて、各自が設定した課題についての調査・研究を深め、各指導教員の指導のもとに、修士論文を作成する。				
【到達目標】 修士論文の作成。				
【指導方法と留意点】 各指導教員の指示に従う。				
【授業（指導）計画】 各指導教員の指示に従う。				
【評価基準】 各指導教員の指示に従う。				
【教材等】 各指導教員の指示による。			【指導担当者】 岩間 香、小川 豊生、瀬戸 宏、 山口 真佐夫、門脇 薫	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
東アジア言語文化研究総合演習Ⅳ Seminar on East Asian Languages and Cultures Ⅳ	2	後期	2	下欄参照
【授業（指導）概要・目的】 総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにもとづき、各自が設定した課題についての集大成として、各指導教員の指導のもとに、修士論文を完成させる。				
【到達目標】 修士論文の完成。				
【指導方法と留意点】 各指導教員の指示に従う。				
【授業（指導）計画】 各指導教員の指示に従う。				
【評価基準】 各指導教員の指示に従う。				
【教材等】 各指導教員の指示による。			【指導担当者】 岩間 香、小川 豊生、瀬戸 宏、 山口 真佐夫、門脇 薫	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
上級英語 I Advanced English I	1	前期	1	シヨーン マクガバン Sean McGovern
【授業（指導）概要・目的】 会話、討論における言語能力とともに、文章作成能力の向上をはかる。授業ではエッセイを読みこなす力を養う。語彙力の増進と、基本的な文章の作成とともに、各自の関心のある課題にそって、レポートを作成し、発表を行う技術の習得に力点をおく。				
【到達目標】 毎週の授業では実践英語の上達過程とし、語彙力をあげる訓練とショートエッセイの読みや、作成に取り組む。				
【指導方法と留意点】 授業では英語でエッセイを読み、文章を作成していく。クラス討論も英語で全て行う。				
【授業（指導）計画】 英語での文章の作成、エッセイの基本構成を学ぶ。各自関心のあるトピックを選び、レポートを作成。				
【評価基準】 クラスワーク 40% レポート 30% プレゼンテーション 30%				
【教材等】 プリント			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
上級英語 II Advanced English II	1	後期	1	シヨーン マクガバン Sean McGovern
【授業（指導）概要・目的】 会話、討論における言語能力とともに、文章作成能力の向上をはかる。授業ではエッセイを読みこなす力を養う。語彙力の増進と、基本的な文章の作成とともに、各自の関心のある課題にそって、レポートを作成し、発表を行う技術の習得に力点をおく。				
【到達目標】 毎週の授業では実践英語の上達過程とし、語彙力をあげる訓練とショートエッセイの読みや、作成に取り組む。				
【指導方法と留意点】 授業では英語でエッセイを読み、文章を作成していく。クラス討論も英語で全て行う。				
【授業（指導）計画】 各自作成したレポートのプレゼンテーションの効果的な技法をまなび、発表する。				
【評価基準】 クラスワーク 40% レポート 30% プレゼンテーション 30%				
【教材等】 プリント			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
上級中国語Ⅰ Advanced Chinese I	1	前期	1	セトヒロシ 瀬戸 宏
【授業（指導）概要・目的】 この授業では自然な中国語対話の運用力とより深い中国語理解力の向上を目指す。講義の素材は新聞雑誌やウェブサイトなどから選び、文法、語彙、発音を詳細に吟味する。文法に関しては基本中国語文法の枠を超え微細な意味の違いに文法がどのように反映しているか、また新生語、流行語の実例を考察する。話題はさまざまだが、その時しか価値のない内容は避けたい。				
【到達目標】 中国の原書の読解力を身につけることを目指す。				
【指導方法と留意点】 テキストを講読してテキストの内容をめぐって講義し、日本語による訳読をおこなう。受講生がネイティブである場合は、正しい日本語に翻訳する訓練を兼ねる。				
【授業（指導）計画】 授業では現代中国をめぐってさまざまなことを講義し、2回1テーマで進む。次の話題を取り上げる予定：1 キャンパス・ライン、2 中国人の家庭観念、3 中国の食文化、4 生活観の変化、5 消費の新しい傾向、6 中国人のレジャー、7 職業選択観の変化、8 中国の経済発展、9 交通問題、10 住宅問題、11 人口問題、12 老人問題、13 交際と結婚、14, 15 中国の媒体。				
【評価基準】 試験成績及び練習への参加				
【教材等】 私製教材やコピーを配布する。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
上級中国語Ⅱ Advanced Chinese II	1	後期	1	セトヒロシ 瀬戸 宏
【授業（指導）概要・目的】 この授業では自然な中国語対話の運用力とより深い中国語理解力の向上を目指す。講義の素材は新聞雑誌やウェブサイトなどから選び、文法、語彙、発音を詳細に吟味する。文法に関しては基本中国語文法の枠を超え微細な意味の違いに文法がどのように反映しているか、また新生語、流行語の実例を考察する。話題はさまざまだが、その時しか価値のない内容は避けたい。				
【到達目標】 中国の原書の読解力を身につけることを目指す。				
【指導方法と留意点】 テキストを講読してテキストの内容をめぐって講義し、日本語による訳読をおこなう。				
【授業（指導）計画】 授業では現代中国をめぐってさまざまなことを講義し、2回1テーマで進む。次の話題を取り上げる予定：1 キャンパス・ライン、2 中国人の家庭観念、3 中国の食文化、4 生活観の変化、5 消費の新しい傾向、6 中国人のレジャー、7 職業選択観の変化、8 中国の経済発展、9 交通問題、10 住宅問題、11 人口問題、12 老人問題、13 交際と結婚、14, 15 中国の媒体。				
【評価基準】 試験成績及び練習への参加				
【教材等】 私製教材やコピーを配布する。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
国際政治特論 I Topics in International Politics I	1	前期	2	オオタ ヨシキ 太田 義器
<p>【授業（指導）概要・目的】</p> <p>国際政治を理解するための枠組みとして国際政治学の諸理論を理解することを目指す。とりわけ、post-positivismと呼ばれる最新の研究動向を紹介する。</p> <p>グローバリゼーションの進展する今日、国際政治の場面に現れる問題は多様化し、複雑になり、数的にも増している。これに対応して、国際政治の理論も深化と拡大をしつつあり、旧来の理論枠組みは早晩、過去の遺物になるだろう。国際政治学は、英米を研究の中心地としてきたのであり、その意味で国際政治の実際同様に、むしろそれ以上に国際政治学においては文化的な偏重が激しかった。post-positivismの研究は、このような偏重のあり方を明らかにするとともに、それに代わるより公正な国際政治の理解の仕方を模索するものと言える。</p> <p>したがって、このような国際政治学の新しい動向を知ることは、より公正な世界のあり方を実現していく上でも、有益である。実践に志向した理論研究のあり方についても、学んで欲しい。</p>				
<p>【到達目標】</p> <p>国際政治学の基本的な理論について、その用語、争点、議論について理解する。あわせて国際政治の最近の動きについて理論的に把握できるようにする。</p>				
<p>【指導方法と留意点】</p> <p>国際政治および国際政治学についての基礎知識をもっていることを期待したいが、これらの点の受講生の準備の程度に応じて適宜、対応して授業の内容を変更する。</p> <p>教材は、英語のものを用いる。</p>				
<p>【授業（指導）計画】</p> <p>国際政治学の20世紀諸学派(リアリストを中心に) 実証主義批判(自然科学と社会科学) フェミニズム 構式主義 コペンハーゲン学派 批判理論 について順次、取り上げて議論していく。</p>				
<p>【評価基準】</p> <p>授業への参加(30%)、中間レポート(20%)、期末レポート(50%)</p>				
<p>【教材等】</p> <p>プリントを配布する</p>			<p>【備考】</p> <p>前期中に全てが終わることは考えられないので、後期の「国際政治特論Ⅱ」に引き継いで授業を進める。</p>	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
国際政治特論Ⅱ Topics in International Politics Ⅱ	1	後期	2	オオタ ヨシキ 太田 義器
<p>【授業（指導）概要・目的】</p> <p>国際政治を理解するための枠組みとして国際政治学の諸理論を理解することを目指す。とりわけ、post-positivismと呼ばれる最新の研究動向を紹介する。</p> <p>グローバリゼーションの進展する今日、国際政治の場面に現れる問題は多様化し、複雑になり、数的にも増している。これに対応して、国際政治の理論も深化と拡大をしつつあり、旧来の理論枠組みは早晩、過去の遺物になるだろう。国際政治学は、英米を研究の中心地としてきたのであり、その意味で国際政治の実際同様に、むしろそれ以上に国際政治学においては文化的な偏重が激しかった。post-positivismの研究は、このような偏重のあり方を明らかにするとともに、それに代わるより公正な国際政治の理解の仕方を模索するものと言える。</p> <p>したがって、このような国際政治学の新しい動向を知ることが、より公正な世界のあり方を実現していく上でも、有益である。実践に志向した理論研究のあり方についても、学んで欲しい。</p>				
<p>【到達目標】</p> <p>国際政治学の基本的な理論について、その用語、争点、議論について理解する。あわせて国際政治の最近の動きについて理論的に把握できるようにする。</p>				
<p>【指導方法と留意点】</p> <p>国際政治および国際政治学についての基礎知識をもっていることを期待したいが、これらの点の受講生の準備の程度に応じて適宜、対応して授業の内容を変更する。</p> <p>教材は、英語のものを用いる。</p>				
<p>【授業（指導）計画】</p> <p>国際政治学の20世紀諸学派(リアリストを中心に) 実証主義批判(自然科学と社会科学) フェミニズム 構式主義 コペンハーゲン学派 批判理論 について順次、取り上げて議論していく。</p>				
<p>【評価基準】</p> <p>授業への参加(30%)、中間レポート(20%)、期末レポート(50%)</p>				
<p>【教材等】</p> <p>プリントを配布する</p>			<p>【備考】</p> <p>前期の「国際政治特論Ⅰ」から継続して、授業を進めていく。</p>	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
国際経済特論Ⅰ Topics in International Economy I	1	前期	2	スキモト アツノブ 杉本 篤信
【授業（指導）概要・目的】 グローバル化の進む中、国際経済の動きを見ることなく、日本経済を語ることは不可能である。例えば、現在の日本の問題「不況」「貿易収支の赤字」「財政収支の赤字」が、どのような問題で、どのように海外の経済と関連しているかを考察するためには、金融、貿易の基本的理論の理解が不可避となる。本講義は、経済理論の理解とそれを通じて現実の経済を分析することを目的とする。特に、経済学では国際経済をどう分析してきたのかを講義する。				
【到達目標】 基本的な経済理論の理解。理論を通しての現実の把握。				
【指導方法と留意点】 特に予備的知識は必要としないが、抽象的な理論を理解するためには、多少の数式やグラフを理解することを躊躇しないこと。				
【授業（指導）計画】 1、国際収支表の見方 2、為替レート 3、貿易の理論 4、貿易の介入の方法 5、発展途上国の貿易介入 6、為替レート決定の理論				
【評価基準】 出席、提出物、報告などを総合的に評価。				
【教材等】 講義中に指示。			【備考】	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
国際経済特論Ⅱ Topics in International Economy II	1	後期	2	スキモト アツノブ 杉本 篤信
【授業（指導）概要・目的】 グローバル化の進む中、国際経済の動きを見ることなく、日本経済を語ることは不可能である。例えば、現在の日本の問題「不況」「貿易収支の赤字」「財政収支の赤字」が、どのような問題で、どのように海外の経済と関連しているかを考察するためには、金融、貿易の基本的理論の理解が不可避となる。本講義は、経済理論の理解とそれを通じて現実の経済を分析することを目的とする。				
【到達目標】 現在の国際経済の動向を理論的考察ができること。新聞、雑誌、テレビなどの経済の情報を理解できること。				
【指導方法と留意点】 国際経済特論Ⅰの内容をよく復習すること。				
【授業（指導）計画】 1、日本経済と国際経済 2、国際マクロ経済学 3、変貌する通商システム 4、国際資金フローと国際金融市場 5、国際的な経済危機の構造 6、新興勢力と日本経済				
【評価基準】 出席、提出物、報告などを総合的に評価				
【教材等】 講義中に指示。			【備考】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
異文化理解Ⅰ・Ⅱ Intercultural Communication Ⅰ・Ⅱ	1	Ⅰ 前期 Ⅱ 後期	2 (半期)	アントウ テツユキ 安藤 哲行 他5名
【授業（指導）概要・目的】 人はそれぞれ固有の文化に育まれて自己形成する。そのため見知らぬ文化に接触すると、驚愕、感嘆、憤怒、等々、さまざまな心理的反応を示すことになる。この講義では、異文化に対する理解と認識のありようを、異なる学問領域の視点に立って検討する。				
【到達目標】 学問対象に対するアプローチの仕方を身につける				
【指導方法と留意点】 文献・資料の読解・調査・検討				
【授業（指導）計画】 基本的には(a)～(f)の中から前期（異文化理解Ⅰ）・後期（異文化理解Ⅱ）、それぞれ2つを選択するが、1つの科目を半期で行う場合もある。その講義内容・評価等については次ページを参照すること。				
【評価基準】 次ページ参照				
【教材等】 次ページ参照			【共同担当者】 安藤 哲行、岩間 香、小川 豊生、篠原 愛人、山口 真佐夫、林田 敏子	

科目名	配当年次	開講期	単位数	担当者
異文化理解Ⅰ・Ⅱ Intercultural Communication Ⅰ・Ⅱ	1	Ⅰ前期 Ⅱ後期	2 (半期)	アントウテツユキ 安藤 哲行 他5名
(a) 「文化と社会」 〔安藤 哲行〕 南北アメリカは様々な文化の混淆・融合を経験しているが、それは多くの作家に民族的・文化的アイデンティティを問いかけさせてもいる。そうした作家の作品をとおして両アメリカを考察する。				
【評価基準】 受講態度・レポート		【教材等】 プリント。なお、随意、関連図書を紹介する。		
(b) 「異文化接触」 〔篠原 愛人〕 アステカ王国征服の過程でスペイン人修道士たちはインディオの言語を習得し、宗教・文化を研究して土着宗教の徹底的根絶をめざした。そうした彼らが残した作品を通して16世紀における他者認識や異文化理解のあり方を探求する。				
【評価基準】 レポートによる		【教材等】 必要に応じ、授業中に配布する		
(c) 「言語と社会」 〔山口 真佐夫〕 まず、アジアに分布する言語の系統や文法的特徴について概観し、それらの言語をおもに比較言語学を通して説明する。また、社会言語学、言語人類学の視点から言語と社会あるいは言語と文化の関係を、異文化接触を含めて考察する。				
【評価基準】 平常点と発表。		【教材等】 プリントを用意する。		
(d) 「異文化受容」 〔岩間 香〕 日本は古代から近世にかけて中国文化の影響を、近世初期と後期にヨーロッパ文化の影響を受けた。しかし受容の実態は単純ではなく、日本の社会や文化に合うものを取捨選択している。異文化の受容とは何か、美術を例に考察する。				
【評価基準】 受講態度・レポート		【教材等】 授業中に配布する		
(e) 「西洋人から見た日本文化」 〔小川 豊生〕 西洋の人々が日本についていかなるイメージを抱き、日本文化をどのようにとらえてきたか、その系譜をたどりつつ、日本あるいは日本文化を、外部の眼差しをとおした「異文化」として研究する。				
【評価基準】 授業への参加状況とレポートを中心に評価する。		【教材等】 授業時に指示する。		
(f) 「植民地支配と異文化接触」 〔林田 敏子〕 イギリスを中心に植民地支配における異文化接触のあり方について考える。人種的・宗教的・民族的「他者」との遭遇がもたらす葛藤をとおして、歴史的視点から異文化を理解する糸口をさぐる。				
【評価基準】 受講態度・レポート		【教材等】 授業中に配布する。		

大学院シラバス

2013年4月

発行 常翔学園 摂南大学

寝屋川学舎 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17番8号
電話 (072) 839-9195 【国際言語文化研究科】

